

ブラジルの新イメージ浸透作戦

桜井悌司（関西外国語大学教授）

2003年11月から2006年3月までジェットロ・サンパウロに所長として赴任した。赴任当時、日本企業のブラジル関心度は皆無と言ってよいほどだった。日本や米国からの日本企業関係者の訪問も非常に少なかった。せっかくブラジルに赴任したからには、何とかして日伯の経済関係の緊密化を図りたいと一生懸命に考え、たどり着いた結論は、ブラジルの新イメージを作り出し、それを日本企業にアピールすることであった。「サンバ、カーニバル、コーヒー、サッカーの国ブラジル」という昔からのイメージからの脱却である。熟慮した結果、「技術の国ブラジル」で打って出ることにした。ブラジルには、世界に誇る技術が少なくとも三つある。航空機製造技術、エタノール生産技術、石油の深海掘削技術である。その当時、それぞれの技術については、関係者の知るところであったが、ブラジル政府を含め、パッケージとして「技術の国」を売り出そうと考える人は皆無であった。最初の具体的行動として、2004年5月にサンパウロ工業連盟（FIESP）の大ミッションを日本に派遣し、また東京でのブラジル・セミナーには、ジェットロ・サンパウロの次長を講師として送り込み、初めて、ブラジルの新イメージを日本企業に訴えた。

その後、上記三つの技術に関連した技術情報や企業情報の作成提供を強化した。航空機製造技術については、世界3位の航空機メーカーであるエンブラエル社の横田聡副社長に「大阪ものづくりサミット2005」に講師として自費で参加していただいた。2005年12月に派遣したブラジル投資ミッションでもエンブラエル社を見学し、横田副社長から同社の戦略や技術について説明を受けた。エタノール生産技術についても、サンパウロサトウキビ生産者連盟（UNICA）が派遣する日本へのテクニカル・ミッションの受け入れを一手に引き受け、石油元売り等関係先にブラジルのエタノール生産技術の優秀性を広く紹介した。その後もUNICAのカルヴァーリョ会長、ブラジル科学アカデミーのクリーゲル会長、サンパウロ州環境庁のゴールデンベルグ長官などを京都で開催された「STS科学技術フォーラム」に招待し、ブラジルの環境技術の発展につき、日本や世界からの参加者にプレゼンテーションしてもらった。ペトロプラス社を取り巻くブラジルのエネルギー事情についても積極的に情報提供したほか、「知られざる技術大国ブラジル」と題する15分のテレビ番組を2006年12月に制作し、ブラジルのエンブラエル社とペトロプラス社の技術力を紹介した。それ以前にもエタノール技術についてのテレビ番組を制作していたので、ブラジルの優れた技術をすべて紹介することができた。

そうこうしているうちに、小泉総理（当時）が2004年秋に、ルーラ大統領が2005年春に相互訪問した。ゴールドマンサックス社の提唱するBRICSの最初にブラジルが入っていたところからBRICSが広まり、2005年秋頃からブラジルを訪問する日本人ビジネスマンが急激に増加し始めた。ブラジルの航空機についても日本航空が10機プラス5機オプション、鈴与が2機購入することが決定した。エタノールの輸入も決断が相当遅れたが、ようやく本格的に輸入する体制に進みつつある。ペトロプラス社も2006年に石油自給を達成した。さらに沖縄の南西石油を買収し、10億ドル規模の投資を行うことになった。本年は、移住100周年、日伯交流年にあたり、日本とブラジルで多くの記念行事が開催されている。日本のテレビ、新聞、雑誌でもブラジルを積極的に取り上げた。なかでも「技術の国ブラジル」に焦点をあてたものも多かった。4年前に始めた「ブラジル新イメージ浸透作戦」がようやく功を奏し始め、日本においても従来のコーヒーとサンバの国から高度技術を併せ持つ国へとブラジルのイメージは変容したように思える。